



■ 聖路加看護学会ニュースレター

第19号 平成18年3月1日 2006.3.1 No.19

[過去のニュースレター](#)

■ 目次

- 第11回聖路加看護学会学術大会にあたって
- LOBBY:エッセイ
- 平成17年度聖路加看護学会学術交流会主催パネルディスカッション
- 第11回聖路加看護学会学術大会のご案内(第2報)
- 平成18年度学術交流委員会開催講演会
- お知らせ

■ 内容

第11回聖路加看護学会学術大会にあたって

第11回学術大会を開催させていただきにあたりご挨拶申し上げます。

第11回は、メインテーマを「病気や障害のある生活と看護」として、聖路加看護大学で開催することにいたしました。生活習慣病に代表される慢性病の管理は、食事・活動全般にわたっており、日常的な営みと切り離して考えることはできません。第二次大戦後の生活水準の向上および医学・医療の進歩に伴い、日本は世界一の長寿国となっていますが、生活習慣病の急増および高齢化の急速な進行は、病気や介護を必要とする人々の増加をもたらす極めて深刻な問題となっていることは、周知の事実です。

「家庭で慢性疾患を管理することは非常に複雑であり、純粋に医学的側面以外の、はるかに多くのことを常に含んでいる」というStraussら*の言葉に示されるように、日常のこまごまとした出来事を調整して病気の管理を続けていくことは、絶え間ない努力を要する非常に困難な仕事です。しかし、変化の激しい現代社会においては、多くの人々は常に厳しい競争にさらされ自分の健康を省みる余裕もなく走り続けています。

本大会は、メインテーマを「病気や障害のある生活と看護」として、会長講演、シンポジウム、一般演題(口演・示説)に加え、聖路加看護学会の特徴である事例検討、交流集会を予定しています。会長講演・シンポジウムでは、メインテーマを受けて、病気や障害をもちながらもその人らしく生活するという、看護専門職は何を求められているか、どのような支援ができるか、について、じっくりと見つめ直す場にしていければと考えています。一般演題と事例検討においては、メインテーマに関連するものだけでなく、本学会の趣旨とする実践に根ざした研究発表を期待しています。交流集会では、専門看護師等のより高度な実践活動あるいは専門看護師教育に関連したテーマを募集しています。

皆様の積極的参加により学術大会のさまざまな場において活発な議論が展開され、会員相互の交流の場となることを企画委員一同心から願っております。

* Strauss,A.L. et al., 南 裕子監訳(1987):慢性疾患を生きる ケアとクオリティ・ライフの接点. 医学書院.

[▲ ページトップへ](#)

LOBBY:エッセイ

学術大会のメインテーマを考えながら、かつて、親しくなったある中年の婦人を思い出しました。厳しい農作業に明け暮れる糖尿病歴10年以上になるその方は「がんばったら息が詰まる・・・。私は病院に来るときは糖尿病だと思うけれど、ふつうの日には病気とは思わない。でも、少しは頭の隅にあるだねえ・・・」「お百姓をもっと楽にやればいいけど、何も売るのは作らんようになったら動かんと思う・・・」と語り、その言葉に深く納得させられたことがあります。病気をもつということは、それぞれの人の生き方そのものが問われるということ、自分自身の問題としても気づかされたことでした。当事者やご家族の書かれた手記は数多く出版されていますが、今回は私たちが自らの健康を考え、病気とどのように向き合っていくかを考えることの一助となる書籍をいくつかあげてみました。参考にいただければ幸いです。

1. 浮ヶ谷幸代(2004):病気だけ病気でないー糖尿病とともに生きる生活世界ー 誠信書房.
2. リチャード・ワトソン、横山貞子訳(2000):ダイエットは人生の哲学. 晶文社.
3. 中川恵一・養老孟司(2005):自分を生ききるー日本のがん治療と死生観ー 小学館.

▲ ページトップへ

平成17年度聖路加看護学会学術交流会主催パネルディスカッション

第9回聖路加看護学会学術交流会は、平成17年5月28日(土)に聖路加看護大学301教室で、濱口恵子氏(財団法人癌研究会有明病院看護部長)、馬庭恭子氏(訪問看護ステーションピース、広島市議会議員)の2人をパネリストとしてお迎えして、「発展していく専門看護師の役割」というテーマのパネルディスカッションを開催いたしました。ここに各パネリストのお話の概要とその後の質疑応答をまとめたものをご紹介します。

< 発展していく専門看護師の役割 >

がん看護専門看護師 癌研究会有明病院 濱口恵子

1. 医療の動向と専門看護師の役割

がん医療を取り巻く動向として、施設から外来・在宅へ移行、在院期間短縮、治療・ケア・療養場所の選択肢の広がり、患者の価値観の多様化、医療の標準化により看護やサービスの差の拡大、腫瘍への効果より患者アウトカム重視、インフォームドコンセント重視、患者の自己決定の尊重、ライフサポートの重要性、等があげられる。このような変化に伴い、がん患者に対する看護の役割も変化しているが、専門看護師の役割は6つある。

- ① 卓越した看護実践、②コンサルテーション活動、③医療チームメンバーやシステムの調整(コーディネーション)、④さまざまな倫理的ジレンマ、治療の中止・継続、インフォームドコンセント、セデーション等の臨床倫理的問題に対応する倫理調整、⑤スタッフへの教育(集合教育のみならず、一人一人の患者さんの解決困難な問題に対して具体的にどのようにケアをしていけばいいのかについてベッドサイドでの教育にかかわりロールモデルを示していくこと)、⑥研究である。

2. 私の活動

私は、1994年に大学院修士課程を修了し、250床の民間病院の教育師長として継続教育およびベッドサイドでの教育・コンサルテーションを行っていた。1996年にがん看護専門看護師の試験を受けることもあり、上司である看護部長の判断で副看護部長に昇格し、CNSの活動と教育担当副看護部長としての管理業務を5年間行った後、静岡がんセンターの開設準備に1年間携わり、2年間静岡がんセンターで勤務した後、現在に至っている。3つの病院を経験して、CNSとして、また看護管理者の一人として感じていることは、①看護管理者がCNSの存在意義や役割を理解しているわけではないこと、②病院の特徴によりCNSに期待される役割が異なること、③CNSは自ら実績を示すことで立場を確保し、活動を確立していくこと＝自分で役割を確立することが必要であること、の3点である。

3. 専門看護師の状況と課題

がん専門看護師は、2004年11月現在44人である。また認定看護師はホスピスケア100人、がん性疼痛看護157人、がん化学療法看護68人である。しかし都道府県別に専門看護師の数をみると東京27人、神奈川24人である一方、1人のみが10県、無しが27道府県と格差が大きい。また複数領域の専門看護師を配置している病院がある一方で専門看護師が一人もいない病院が数多くある現状である。また教育機関、CNSカリキュラムの問題、専門看護師の組織上の位置づけの問題、雇用の問題等があげられる。これらをまとめると今後の課題として、①看護管理者の専門看護師に対する理解を促すこと、②専門看護師のアウトカム研究、③診療報酬上の裏づけ、④組織上のポジション確保、⑤専門看護師教育課程の工夫、⑥領域を超えた専門看護師の連携・連絡会、⑦専門看護師と認定看護師との役割分担、があげられる。看護師全体が本当の意味でのチームアプローチを実践し、「患者さんにとってどうあったらよいか」を機能面から考え、行動できるようになってほしい。

< 発展していく専門看護師の役割 >

地域看護専門看護師 馬庭恭子

1. はじめに

地域看護CNSとして、地域を舞台にしてすべての人々が安心して生活できるシステムを作ることを目指している。

2. 地域看護CNSの現状

わが国において地域専門看護師は3名しか認定されておらず、未だ普及していない現状がある。しかし、地域看護に

においてCNSの役割は今後ますます拡大していくことが予測される。産業保健、学校保健、保健行政、在宅ケアの4領域において、課題が凝縮し、重複し、散在している。地域看護はとてつもなく広大で複雑なフィールドであるといえる。まず、火急の課題として1)領域別にまず登録数を増やす2)在宅ケアなどニーズの高い領域から増やすことが挙げられる。この状況下において、地域看護CNSはキャリアを活用して自ら活動内容をデザインする能力が求められている。

3. 目にみえる地域専門看護師としての活動のポイント

人、物、金、情報を管理することに集約される。そのため役所や病院などの意志決定するポジションに参画しないと変革は起こせないといえる。以下にポイントを述べる。

① 看護の視点での社会変革の意識化

社会の動きに敏感になっておくべきである。

② 自律度、自由度を駆使した協働

地域看護CNSは地域をまわってヒアリングして政策に活かす。保健福祉は医療職なので利益誘導の必要性がないので自律度が高いといえる。

③ アピール

露出度を高くし、地域看護CNSの認知度を高める。

4. おわりに

総括すると、これからの課題として、6つの機能の評価をすすめ、実践、研究、相談、調整、倫理、教育の充実を図るためにCNSの認定数を増やすことが課題である。そして、CNSネットワーク・教育機関が連携して、CNSコース地域看護を育てていくべきである。最終的には利用者である国民による評価が求められる。

< 質疑応答、ディスカッション >

(参加者:60名)司会:中村めぐみ委員(聖路加国際病院看護部、がん看護専門看護師)

専門看護師のさらなる発展にむけて、活発な質疑応答が行われた。

1. 上級看護実践者であるCNSと一般看護師との業務上の相違点について

濱口:

本来の看護の機能に、上級看護実践として、①治療に関すること ②緩和ケア ③病と向きあうこと、の3点が付記できる。

2. 専門看護師と認定看護師の違いについて

濱口:

直接的援助においては認定看護師が長けているかもしれないが、CNSは現象だけではなく全体的に問題をとらえることができる。たとえば、認定看護師が現象に関わり、創傷治癒という目に見えるoutcomeを出すのに対し、CNSは本質に関わり、研究的に取り組みシステムを変えることができる。いずれも感覚的な差異であるため、今後の検討が必要である。

梅田:

認定看護師は決まった業務をこなすことに長けており、指示を待つ傾向がある。患者の変化に合わせて、システムを変えていく力は弱いと推測されるため、CNSの広い視野が必要となってくる。CNSと認定看護師は見ようとする範囲(視野)に違いがあるように思う。

馬庭:

CNSと認定看護師は、システム開発、組織づくり、異業種との連携、現在の枠組みを拡大(強化)するためのクリエイティビティが違うと思う。

鶴田委員:

CNSはシステム開発、看護部長等の意志決定の指標になるため、管理者には欠かせない存在であるという示唆もある。

3. 教育背景の違いについて

認定看護師は看護協会の研修を6ヶ月~1年近く受けるが、CNSは大学院(2年間)教育を受ける必要がある。この違いは何かという問いに対して、それぞれ実習生を受け入れる施設の管理者として、次のような感想が述べられた。

秋山委員:

認定看護師は職場の勧めによって取得する場合が少なくない。看護への思い、モチベーションにばらつきがある。CNS学生は本質にせまり、看護をとらえている。学問的背景があるように伺える。

中村委員:

CNS学生は難しい患者(症例)について、一緒に考え、役割モデルとなり、学びがある。全体を巻き込む力がある。

認定看護師学生は自分たちの専門能力を開発することに必死であり、相いれない雰囲気がある。

鶴田委員：

実践上のさまざまなケースでの問題を解決するためのプロセスを学び、ベースを作ることが大学院教育の意義なのではないか。

4. CNSの発展に向けて

1) コーディネーション能力の必要性

治療方針についての提案を看護師の役割として担ってもよいと思うが、医療コーディネーターとして機能するためには、コンサルテーション料がとれないことが問題である。また、大規模病院においては、医療連携室、医療相談室、看護相談室の連携が不可欠である。CNSは医療チームの中で、システムづくりの役割を担うべくコーディネーション能力が必要である。

2) ポジションパワーの使い方

ポジションパワーとCNS本来の能力との違い、使い分けについて、最初にポジションが必要ではなく、CNSの役割は自分たちで勝ち取るもの。自分の形でデザインしていくものである。

※専門看護師(CNS)に限らず、各自の組織で看護師が発展していくにはどうしたらよいか考えるきっかけにしてほしいと締めくり閉会した。

文責 学術交流委員会

[▲ ページトップへ](#)

第11回聖路加看護学会学術大会のご案内(第2報)

メインテーマ:「病気や障害のある生活と看護」

日 時: 2006年9月23日(土) 9:30~17:15

会 場: 聖路加看護大学 東京都中央区明石町10-1

プログラム

会 長 講 演 : 「慢性病とともに生きる人々を支える看護」

シンポジウム: (仮題)「病気や障害のある生活

—看護専門職は何を求められているか—(シンポジスト交渉中)

一般演題(口演・示説)・事例検討・交流集会

演題申し込み締切日

2006年4月24日(月)必着

抄録集原稿締切日

2006年5月22日(月)必着

参加費

学会員 3,500円(当日参加 4,000円)

学会員(大学院生) 2,500円(当日参加 3,000円)

非学会員 4,500円(当日参加 5,000円)

※事前申し込み期限 2006年8月11日(金)

問合せ先

大会事務局: 〒433-8558 静岡県浜松市三方原町3453
 聖隷クリストファー大学・看護学部
 第11回聖路加看護学会学術大会事務局

FAX:053-439-1406(大学事務) e-mail slnr11@seirei.ac.jp

※詳細は、第11回聖路加看護学会学術大会 ご案内をご覧ください。

[▲ ページトップへ](#)

平成18年度学術交流委員会開催講演会

テーマ：看護の社会貢献—国家資格をどう生かすか—

講師：清水嘉与子氏(現参議院議員)

日時：2006年7月8日(土) 14:00—16:00

場所：聖路加看護大学

主旨：

急速な高齢社会、医療制度改革といった言葉を聞いて、あなたは何を考えますか？医療や介護の現場そして地域そのもの全てが高齢化しているということです。これまでのやり方では、その増え続けるニーズには応えていけない世の中が、すでに目の前に展開されてきているということです。国民や関連職種の人たちは、看護職に何を期待しているのでしょうか。国家資格には、国が機能するために欠かせない役割としての責務を負っているという意味を、今立ち止まって考える必要があるのではないのでしょうか。国が直面している危機に、あなたの国家資格は生きていますか？

学術交流委員会

[▲ ページトップへ](#)

お知らせ

学会誌編集委員会

編集委員会の新メンバーをご紹介します。木下幸代(委員長)、及川郁子、片岡弥恵子、佐藤紀子、白水真理子、瀬戸屋希、鳩野洋子、村上好恵、森田夏実、以上9名です。充実した学会誌になりますよう、多くの方々のご投稿や学会誌へのご意見をお待ちしております。

編集委員会は現在6月発行予定の第10巻1号の編集作業を進めております。たくさんのご投稿ありがとうございました。なお第10巻2号は、従来とおり9月の学術大会講演集となります。学術大会後には、また多くのご投稿が寄せられますようお願い申し上げます。

(委員 及川)

学術交流委員会

学術交流委員会の新メンバーは、中村めぐみ(委員長)、鶴田恵子、山田雅子、高井今日子、大森純子、横山美樹の6名です。刺激的な、興味深いテーマを企画したいと思っております。今年度の会はご案内にあるとおりですが、刺激的なものとお自負しております。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

会計からのお知らせ

2006年度の年会費の納入をお願いいたします。先の総会で年会費8,000円への値上げが承認されました。納入をどうぞよろしくお願い申し上げます。

- 2005年度までの年会費の納入がお済でない方は5,000円×不足年数分の納入をお願いいたします。
- すでに2006年度分として5,000円を納入されている方は追加分として3,000円の納入をお願いいたします。

(担当理事:田中美恵子 大隅香)

振込み先:郵便振替口座 00100-8-670371 加入者名 聖路加看護学会
年会費 :5,000円

庶務より

当学会は、質の高い看護を提供するために看護学の発展に貢献したいと願う看護学探求者の学術交流の場を提供しています。研究に取組んだばかりの卒業生や大学院修了生の方々をはじめ、実践、管理、教育・研究等さまざまな分野で活躍する皆様の研究成果を発表し、意見を交換する場として是非ご活用ください。そして、研究の輪を周囲に広げるためにも、多くの方のご入会をお勧め下さい。入会資格者は聖路加看護大学の卒業生に限りません。質の良い看護実践をめざす方のご入会を心よりお待ちしております。「入会のしおり」のご請求、会員の皆様の連絡先の変更などがございましたら、FAXまたは郵便で学会事務局までお知らせ下さい。また、3月と4月は移動の時期です。勤務先やご自宅の住所変更などございましたら、必ず事務局までお知らせ下さい。学会ホームページも是非ご覧下さい。

(庶務:高木廣文、鈴木久美)

編集後記

第11回学術大会のテーマは、「病気や障害のある生活と看護」です。今の世の中、誰しも何かを抱えて生活しているのではないのでしょうか。興味深いテーマに、学術大会が待ち遠しいです。(Y.S.)

[学会について](#) | [入会案内](#) | [お問合せ](#) | [よくある質問](#) | [学術大会](#) | [ニュースレター](#) | [学会誌](#)

St. Luke's Society for Nursing Research | [サイトマップ](#)